

JAPAN ICOMOS / INFORMATION

INTERNATIONAL COUNCIL ON MONUMENTS AND SITES
JAPANESE NATIONAL COMMITTEE 日本イコモス国内委員会

8期 — 4号



2010.12.15

目次

- はじめに／西村幸夫 01
- 2010年次第3回拡大理事会報告(9/18)／山田幸正 02
- 諮問委員会・執行委員会報告(ダブリン)／西村幸夫・岡田保良 06
- 王力軍氏 ICOMOS 平泉調査随記／前野まさる 08
- 琵琶湖疏水竣工120周年記念シンポジウム報告／刈谷勇雅 09
- マイルズ・オグリソープ氏講演会報告／山内奈美子・ウーゴミズコ 10
- CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会報告／杉尾邦江 10
- ICOMOS-IFLA 文化的景観国際学術委員会2010年総会報告
(イスタンブール)／杉尾伸太郎・山田素子 12
- ISCARSAH 歴史的建築物の解析と構造修復に関する国際学術委員会報告
(上海)／花里利一 13
- ICOMOS-CAR 岩面画国際学術委員会活動報告／五十嵐ジャンヌ 14
- 韓国岩面刻画発見40周年記念国際研究集会に参加して／小川 勝 14
- 日本イコモス国内委員会関連行事報告
- 百舌鳥・古市古墳群世界遺産暫定一覧表掲載記念講演会／小川裕見子 15
- シルクカントリー in 下仁田／松浦利隆 16
- 第5回文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワーク
ショップ／高瀬 裕 17
- 第12回世界歴史都市会議ワークショップ「歴史都市の文化継承のための
制度設計」／大窪健之 17
- 歴史的用水国際シンポジウム in 金沢／岡田宜之 18
- 国際シンポジウム「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」／小田由美子 19
- 会員からの声
- トルコの古都・ベルガマ訪問記—歴史と共に生きる
／狩野朋子・黄ワンウエン 20
- イベント案内
- 第34回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「『復興』と文化遺産」
／友田正彦 21
- 事務局日誌 22

はじめに 西村幸夫

ダブリンで開催されたイコモスの諮問委員会に日本から岡田保良先生とともに参加してきました。会議の詳細は別に紹介記事として本インフォメーション誌に掲載していますのでそちらを参照していただければと思いますが、ここではダブリンのことを書きます。

会議の冒頭にメアリー・マッカーレス大統領からのあいさつがあったのですが、これが文化の本質を突いた興味深いものでした。会議が開かれたのはダブリン城という、ダブリンのへそとも言うべき歴史的建造物なのですが、ダブリン城に対するダブリン市民の感情は複雑で、必ずしも好意的でないというのです。というのも現在の建物の大半は18世紀から19世紀に建てられ、イギリスの総督府の建物として使われていたからです。つまり、このお城はイギリスによる植民地支配の象徴でもあるのです。

私たち日本人にとって、いくら城郭が封建時代の象徴であると言われても、お城がまちの誇りであることに変わりはありません。歴史的遺産と言ってもいろいろな立場があるのだということを確認させられました。

もっとも現在ではダブリン城は、大統領の説明によると、市民共通の資産だと考えられているということですが、こうした受容の歴史そのものも歴史資産のあり方として重要なのだと思います。

はからずも文化遺産の複雑さを実感する機会にもなりました。

2010 年次第 3 回拡大理事会報告

2010 年次第 3 回拡大理事会が去る 2010 年 9 月 18 日（土）午後 1 時半から午後 4 時まで、琵琶湖疏水記念館 2 階 AV ホール（京都市左京区南禅寺草川）で開催された。出席者は、委員長：西村幸夫、副委員長：赤坂 信、事務局長：矢野和之、理事：苅谷勇雅、杉尾邦江、濱崎一志、宗田好史、山田幸正、監事／小委員会主査：崎谷康文、顧問：伊藤延男、本部執行委員：岡田保良、ISC 委員：杉尾伸太郎、佐々波秀彦（陪席）、事務局：館崎麻衣子、藤岡麻理子の 15 名である。拡大理事会で討議された審議事項、協議事項、報告事項は以下の通りである。

議事に先立ち、急逝された藤本強先生のご冥福をお祈りして、拡大理事会参加者一同、1 分間の黙祷を行った（報告事項 6 を参照）。



1. 入退会者の承認

1) 入会者

申請書類の回覧、審議の結果、以下の個人会員 2 名と維持会員 1 社の入会が承認された。

個人会員

氏名	勤務先	専門分野	推薦者
関矢 健夫 (せきやたてお)	株式会社 イムン研究所	文化財保存・修復	矢野和之・甲斐幸子
中嶋 徹 (なかじま とおる)	株式会社 竹中工務店	近代建築の保存・活用	矢野和之・津村泰範

維持会員

組織名	代表者氏名	業務内容・専門分野	推薦者
株式会社 ゴールドデン 佐渡	澤邊 一郎	観光施設 (史跡佐渡金山および 史跡尾去沢鉱山)	岡田保良 矢野和之

2) 退会者

個人会員・維持会員 なし

3) 日本イコモス国内委員会会員数（今回の入退会者を含む）

個人会員 382+2-0=384 名

維持会員 14+1-0=15 社



1. ICOMOS Cultural Heritage Monitoring Network について

世界文化遺産の保存状況や課題等を各国内委員会が自主的な立場から報告書を作成して毎年本部に提出するという本プロジェクトについては、前回拡大理事会（6/19）でその対応が協議された（本誌第 8 期 3 号を参照）。その結果、本年度については①姫路城（担当：八木雅夫）、②古都京都（濱崎一志・宗田好史）、③広島原爆ドーム（矢野和之・前野まさる）、④白川郷・五箇山（西村幸夫・西山徳明・久保田尚）の 4 つのサイトについて試行的に実施することとなった。本年 10 月末ダブリンで開催予定の諮問委員会／執行委員会への提出にむけて、当初、8 月末を報告書の提出期日とされていたが、9 月開催の本拡大理事会の協議を経たうえで提出する旨、すでに本部に連絡済みである。

提出された報告書原稿を閲読しながら、各執筆担当者から概要が説明され、闊達な意見交換が行われた。①姫路城では、現在進行中の本丸修理は、Restoration ではなく、Conservation ではないか、バッファゾーンにおける高さ規制が neglect されているという表現は強すぎないかなど、②古都京都では、京都市以外の宇治市と大津市の規制状況が今回、含まれておらず、次回からの課題であるなど、③広島原爆ドームでは、旧市民球場跡地を含めてバッファゾーンの拡大が図られているなど、④白川



郷・五箇山では、両地域で状況がかなり異なるなど、さまざまな意見が出された。なお本拡大理事会以降も、基本的な事実関係、用語法、地元などへの影響関係など報告書原稿に指摘すべき点があれば事務局に連絡するよう要請された。当該の報告書については、後日、事務局において調整・校正を行ったうえで、9月中旬に本部に提出することとなった。

2. Joint ICOMOS-TICCIH Guidelines について

TICCIH（国際産業遺産保存委員会）との合同で、“Joint ICOMOS-TICCIH Guidelines for the Conservation of Industrial Heritage Sites”（産業遺産の保存に関する ICOMOS-TICCIH 共同ガイドライン）の策定が進められている。今秋の執行委員会での承認が必要なため（来年のバリ総会での採択をめざす）、当該ガイドライン草案への意見照会が各国内委員会になされている。また現段階ですでにフィンランド ICOMOS からは全体的に未完成であり、認められないとの意見表明があり、またオランダ ICOMOS からは一部の文言についてのみのコメントが寄せられている。事務局では、数名の方に個人の資格でコメントをいただくよう依頼した結果、赤澤泰、中山俊介、松浦利隆の3氏からご意見が寄せられた。提出期日は当初、8月16日と設定されていたが、本拡大理事会での審議・承認のうえ、9月中旬に提出する旨を本部に連絡した。

ICOMOS ではこれまで採択されてきたものは、“Principle”か“Charter”の2種類であったはずで、かなり概念的な内容を含んでいるのに、“Guideline”とするのは何故か。TICCIH の“Nizhny Tagil Charter”と内容的にかなり類似しており、ICOMOS と共同して出す意味が定かではない。産業遺産の対象として、西欧では産業革命にかかわる遺産が一般的であるのに対して、日本やアジアなどに多い、それ以外の遺産はどう扱われるのか。また現在も使用している、いわゆる「稼働資産」についてはどうなのか。以上のように、かなり議論として本

質的で重要と思われる事項が含まれているとの認識で、上記3氏からのコメントに付け加えるかたちで、日本イコモス国内委員会としての意見をまとめ、理事の間でのメール審議を経て、本部に提出することとなった。

3. 平泉の世界遺産登録申請にかかる国内委員会の意見書について

日本国政府が提出している「平泉—仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」の申請書に関し、本部より日本イコモス国内委員会のコメントが求められており、そのドラフトの作成を稲葉理事に依頼した旨、西村委員長より報告された。

当該ドラフトについて、周辺のバッファゾーンに若干の問題があるとする以外、非常に肯定的な内容となっている。ただ、「特に芸術的価値の高い建築及び庭園」「優秀な芸術作品群」など芸術性がかかり重視されているが、例えば「柳之御所遺跡」など一部に地域としての一体性、関連性の強い遺産も含まれていることを十分理解してもらえるような内容を付け加えたほうがよいのではないか、などの意見が出された。稲葉理事と再度調整のうえ、後日、最終のドラフトをメールなどで追認していただくこととした。

4. 国際研究会組織と運営

2009年11月1日に開催された世界遺産国際交流シンポジウムにおいて採択された「伊勢宣言＝世界遺産平和宣言」で提唱された5つの行動指針を実現するための国際研究会が設置され、その準備会が発足したことはインフォメーション誌第8期2号において報告された。その活動資金を得るため、社団法人東京倶楽部に助成金の申請を去る8月10日に行い、このほど2010年度分として、マドリッドおよびパリで開催予定の国外研究会への外国旅費と現地滞在費（合計5名分）、国内旅費、若干の雑費を含む総額約250万円の助成が認められた。以上の通り、杉尾邦江理事より報告され、了承された。

これに伴い、活動の全般の方針、担当者や役割などについて、検討された。担当者としては、先の準備会のメンバーを中心に、参加者の公募を行うこととなった。基本的な活動方針として、杉尾理事の構想が承認された。

5. イコモス国際学術委員会 ISC にかかわる会員情報の収集について

前野前委員長を中心に、かねてよりイコモス国際学術委員会 ISC について、関心分野にそって会員情報を整理する試みが行われてきたが、これを引き継ぐかたちで、事務局では、会員に対して「関心がある分野の ISC」に関するアンケート調査を行い、それをもとに、イコモス本部などからの専門的情報を分野ごとにわけて配信し、将来的には ISC ごとの国内委員会の設立など、具体的な活動の活性化・促進を図りたいとの提案が、矢野事務局長よりなされた。

これに対して、「ISC の活動等についての情報は個人的にも十分入手可能である」「ISC の国内版をつくっていくことはよいが、西安大会以降、ISC の構成委員について大きく変更されているので、国内的な活動と国際組織での活動とをきちんと住み分けすることが肝要だ」「イコモス会員としてのサービスが十分に受けられていないという不満を少しでも改善すべきだ」などの意見が出された。議論の結果、はじめから何らかの組織をつくることを考えるわけではなく、情報発信をよりきめ細かく行っていくためのベースとして、事務局が当該のアンケート調査を実施し、ISC 関連のメーリングリストを作成することを了承した。

6. 法人化について

日本イコモス国内委員会を現行の任意団体から一般財団法人に移行することについて、かねてより検討を進めている。本会規約と法人の定款との整合性については、引き続き、河野副委員長に検討をお願いし、新たな組織としての設立原資 300 万円については足立基金の活用も含めて検討を進めている。以

上のように矢野事務局長から報告があり、了承された。

7. ICOMOS メンバーシップカードの特典について

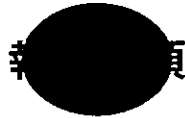
ヨーロッパ諸国などと異なり、日本では ICOMOS 会員カードの特典がまったくないことに対して、理事会として協議・検討してきたが、これまでのところ、国立の美術館・博物館を中心に、各館個別に善処をお願いするしかないとの認識に至っている。これに関連して、崎谷監事より、姫路城については姫路市長の了解をとればなんとかなるかもしれないとの情報が寄せられた。今後、宇治の平等院などにも理解をいただけるよう依頼ができないか、などの意見が出された。

8. 本部執行委員会の役員選挙について

来年 11 月 27 日から 12 月 2 日にパリで開催予定の第 17 回イコモス総会での本部執行委員会の役員選挙で改選予定の岡田執行委員（現在、第 1 期）の後任について、検討・協議を始めた旨の発言が、西村委員長よりなされ、了解された。

9. 2012 年世界遺産 40 周年記念行事について

世界遺産条締結 40 周年の記念行事（2012 年 11 月 16 日の開催予定の最終的な式典）を我が国に誘致したい旨の文言が、今回の世界遺産委員会の文書に掲載されている。この件に関して日本イコモス国内委員会として、より実りある記念行事となるよう、提案やサポートなど協力していく意志を日本国政府（外務省および文化庁など）に表明していきたいとの西村委員長からの提案がなされ、これを承認した。



1. Miles Oglethorpe 氏講演会の開催について

日本イコモス国内委員会の企画として、2010年10月18日、Dr. Miles Oglethorpe (Head of Policy Liaison & Modernisation, Historic Scotland) による講演会“Scottish World Heritage Sites-Challenges and Opportunities”を岩波書店アネックスビル（東京・神保町）で開催する予定であることが、事務局より報告された。なお、参加費は、イコモス会員は無料、非会員は1000円として、案内していることもあわせて報告された。

2. 平泉評価ミッションについて

去る9月8日と9日、「平泉一仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」に関する評価ミッションが、中国建築設計研究院建築歴史研究所の王力軍氏によって実施され、国内委員会から前野まさる前委員長が同行された。また、9日夜、東京にて、平泉での視察を終えた王氏との会合がもたれた（詳しくは、本誌関連記事を参照下さい）との報告があった。

3. 三重大学・日本イコモス共催の国際セミナー開催について

前回の拡大理事会（6/19）において、日本イコモス国内委員会が共催することが承認された国際セミナーについて、詳細な実施企画書がISCARSAH委員・花里利一氏より寄せられ、これを了解した。

なお、主な概要については以下の通り。

■テーマ：『五重塔もパルテノン神殿もなぜ地震で倒れないか？』 地震国古代建築の耐震構造－パルテノン神殿と法華経寺五重塔の耐震性観測報告

■場所：千葉県市川市法華経寺本院大広間

■日時：2010年11月20日（土）12:30～16:30

■講演者：マリア・イオアンニドゥ（アクロポリス修復事務所長）／アンドロウニキ・ミルティアドゥ（ギリシャ文化省、ISCARSAHメンバー）／ハリス・モウザキス（アテネ工科大学）／箕輪親宏（防災科研）／日塔和彦（東京芸大）／花里利一（三重大）

■概要：ギリシャは日本同様に地震国でありながら、パルテノン神殿など古代の建築遺産が地震に耐えているものがあります。日本でも法隆寺五重塔をはじめ、地震に耐えてきている古代の建築遺産があります。実は、比較すると、パルテノン神殿と五重塔の耐震性には共通した特徴があります。25世紀の間、地震では大きな被害を受けていないアテネ・パルテノン神殿の耐震性能を把握するため、現在、国際共同研究としてパルテノン神殿で地震観測を実施しています。また、日本では、1622年に建てられた山中法華経寺五重塔で地震および風観測を実施しています。本セミナーでは、両国で行われているこれらの学術調査の成果を公表するとともに、日本とギリシャの建築遺産の耐震性についてディスカッションする場とします。ギリシャ側からは、アクロポリスの世界遺産建造物群の保存修理事業の現況と近年の地震で被災した世界遺産ビザンチン教会の修理事業とモニタリングについても報告があります。

4. 会費納入状況

2010年9月8日現在の会費納入状況を確認した。なお、理事等で個別に会費納入について注意喚起をしていただくよう要請された。

[会費納入済み]

個人会員	2008年分	310名／343名中
	2009年分	334名／367名中
	2010年分	234名／377名中
維持会員	2010年分	9社／14社中

[滞納者]	2年滞納	45名
	3年滞納	24名
	4年以上滞納	10名

* 2年滞納者までは、イコモス会員カードを請求書とともに郵送。

** 4年以上の滞納者に対しては、2010年度よりインフォ誌の配布は行っていない。

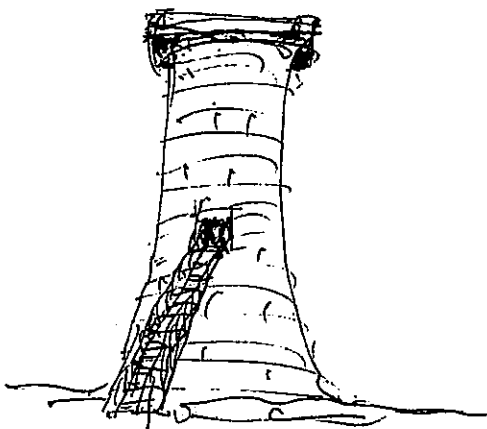
5. OUV に関する検討委員会の設置について

近年の我が国からの世界遺産申請に際して、OUVの点でなかなか理解を得にくい状況が続いている。また、OUV そのものについても考え方が変化しつつあるのではないか。新たなクライテリアの提案などを含めて、西欧の専門家を説得できる論理構築をめざして、OUV について検討する委員会を立ち上げるべきではないか。以上のような提案が、伊藤延男顧問よりなされ、理事会として前向きに検討することとなった。

6. 藤本強先生のご逝去

日本イコモス国内委員会の元副委員長、藤本強先生（東京大学名誉教授）が旅行先のドイツで、現地時間の9月10日午前8時30分、逝去されました。文化審議会の世界文化遺産特別委員会の委員長、文化庁の古墳壁画保存活用検討会座長などを歴任され、高松塚古墳やキトラ古墳の壁画保存にも関わってこられました。日本イコモスとしては、組織名で弔花を、委員長名で弔電を贈りました。心よりご冥福をお祈りいたします。

（担当：山田幸正）



イラスト/前野まさる (以下すべて)

諮問委員会・執行委員会報告（ダブリン）

西村幸夫・岡田保良

2010年10月27日と29日にアイルランドの首都ダブリンにおいて、各国のイコモス国内委員会の委員長および国際学術委員会（ISC）の会長が集う諮問委員会が開催されました。今回の会議には47カ国から参加があり、過去最大の諮問委員会になったと主催者のアイルランド国内委員会から誇らしげに報告がありました。また、諮問委員会の間の10月28日にはISCの全体会議である学術カウンスルが開催されました。並行して11のISCの会議が前後の日程で開催され、これも大きな動きでした。

諮問委員会には日本からは国際イコモスの執行委員である岡田保良先生と私が参加しました。私は初日の諮問委員会の状況を報告します。

諮問委員会はダブリンの歴史的建造物であるダブリン城内の大変モダンに改造された国際会議室で開催されました。はじめにアイルランド大統領メアリー・マッカーリース氏の機知に富んだ挨拶があり（この内容に関しては巻頭の挨拶で触れました）、その後友好団体としてイクロムとティキーの代表からの挨拶がありました。

その後、イコモス首脳部から現在進行中のいくつかのプロジェクトの説明がありました。その中で日本のイコモス会員にも関係するものをいくつか報告します。

第一は、イコモス本部のオープン・アーカイブの計画です。これは、イコモスが関連した会議やシンポジウム、ワークショップなど何でもいいのですが、そこで発表された正式な論文や決議などを、各自がイコモス本部のオープン・アーカイブにアップロードする、という計画です。言語を問わないので、日本語の論文や決議なども掲出することが可能です。イコモス本部の狙いは、多様な情報をイコモス会員全体（のみならず関心を持っている専門家全体）で



共有しようというもので、このアーカイブにアップロードできるのはイコモス会員に限るのですが、閲覧はだれでも可能なように設計されるようです。イコモスのサイトから国際発信ができるようにするというもので、これは日本の専門家にとっても歓迎すべきものと思います。

第二に、イコモス会員の情報を各自がウェブ上で入力するというデータベースの計画が進んでいることです。このデータベースにはそれぞれの会員の発表した主要論文などの活動内容が入力できるように設計されているようで、ここからも会員の情報発信が可能となるようです。

第三に、純粋な査読付き論文集 E Monumentum という電子論文集の刊行が計画されていることです。これはアロウズ会長のイニシアティブによって始まったもので、国際的な編集委員会を立ち上げ、専門家に査読論文発表の機会を提供しようというものです。特に途上国においては専門家に論文発表の機会が少ないということから、発想されたものです。ただ、実際に年 2 回の論文集が発行できるのかは、やってみなければわからないということでは試行してみるということで始まるようです。2011 年の 7 月に創刊号をウェブ上で発表する予定で、これに向けて ISC のうちどこかひとつと国内委員会のうちどこかひとつが協力してボランティアとして編集を行うという計画です。ISC と国内委員会はこのあと順番に担当を回していく、という構想のようです。

ここで発表する論文は必ずしも未発表のものに限るわけではなく、イコモスの国際シンポでの論文集などのようにその後の国際的なサーキュレーションが望めないものに積極的に陽の目を当てようとするものです。これも進み始めると、日本のイコモス会員にも論文発表の機会が増えることになるので、歓迎すべき動きだと思います。

これらの提案は、今後、各国内委員会や ISC からのコメントをもとに改善され、来年 11 月に予定されているパリでの総会で正式にスタートすることになるとは思いますが、E Monumentum の出版は前倒し

のスタートが予定されているようです。

このほか、来年のパリでの総会の日程概要が報告されました。以下の通りです。

11月25日（金）本部執行委員会

11月26日（土）諮問委員会（午前）、学術カウ
ンシル（午後）

11月27日（日）総会開会・本部執行委員会（午前）、
諮問委員会（午後）、全体レセプション（夜）

11月28日（月）総会・開会セレモニー（午前）、
科学シンポジウム（午後）、地域別会合（夜）

11月29日（火）学術シンポジウム（全日）

11月30日（水）学術シンポジウム（午前）、総
会・選挙（午後）、ISC イベント（夜）

12月1日（木）総会・決議（午前）、総会・閉会セ
レモニー（午後）、ガゾーラ賞レセプション（夜）

12月2日（金）イコモスの新しいオフィス
（Domaine de Chantilly）訪問

12月3日（土）新執行部による委員会（午前）、ポ
スト・コンフェレンスツアー出発

日本イコモスの会員の皆さんも今のうちから来年のカレンダーにこれらの日程を書き込んでおいていただければ幸いです。特に選挙の投票が行われる 11 月 30 日は会場にいることができるような日程で参加のスケジュールを各自組んでいただきたいと思います。（西村）

例年のことですが、諮問委員会に合わせて開かれる執行委員会の役割は、諮問委員会に諮る議事を確定することと、諮問委員会で議論された結果を取りまとめ、来る総会での決議事項の準備とする意味があります。したがって会議期間の最初と最後、すなわち 11 月 26 日と 31 日に委員会が設定され、私は 25 日夜にダブリンに入り、31 日午後に出国するという日程でした。

諮問委員会の 2 日目は 29 日に開かれ、そこでの主な内容は、1) 会長提案によるモニタリングネットワークの創設と筑波大学等世界遺産コースの大学

院とのパートナーシップ、2) 財政健全化の観点から個人会費を3段階とする改訂案、3) インドをはじめ基盤が揺らいている国内委員会への支援、4) イコモス支援を後退させたイングリッシュ・ヘリテージへの対応、5) イコモス憲章の改訂案の検討、など。このほか、2011年4月18日「国際記念物の日 Day of Monuments」のテーマを「水の文化遺産」とする提案がありました。日本イコモスとしても何か対応できるのではないのでしょうか。

2005年の西安大会以後、当時副会長だった Aroaz 氏が率先し、ISCの活性化とISC活動をICOMOSの基軸に置く方向性が定まり、ISC代表の集まりである「学術カウンスル」が発足。毎年の諮問委員会と独自の集会和、カウンスルが主催するシンポジウムが開かれるようになりました。27日午前が開かれた全体集会では、事前に日本でも検討が加えられたICOMOS-TICCIH共同原則案が議論され、翌日の諮問会議に修正案が採択されました。また、ユネスコ世界遺産センターやイコモス CIVVIHなどが共催し、2011年秋に発足が予定される「世界遺産都市機構 Organization of WH Cities」には、多くの会議参加者とISCが関心を表明していました。

午後にはISC個別会議が開催されましたが、並行して諮問委員会の行事である「地域会議 regional meeting」が開かれました。当然ながら私はアジア太平洋で括られた会場に出席し、西村新体制の発足、国際モニタリングへの対応、TICCIHへの関心など、日本イコモスの活動を紹介しました。他には中国、韓国、オーストラリアという常連国の出席があったのみで、少々さびしい集まりでした。

30日は終日学術シンポジウムで、今回の基本テーマは「変化する社会?」。7題の研究発表は、全部を紹介する余裕はありませんが、ポーランド・クラコフの市街地景観が憂うべき状態との報告に始まり、エチオピアの岩窟教会の社会開発への貢献を提唱するものなど多彩でした。じつはこの会場で、千葉大学から出席していた2人の女性との出会いがありました。妻籠宿をポスターで紹介するため、赤坂先生

が派遣された方たちでした。おかげでダブリン最後の夕食を楽しむことができました。

31日、総括の執行委員会は、所を変えてクライストチャーチ街にある18世紀のお屋敷で開かれました。残る委員も少なくなるなか、国際博物館会議 ICOMの総裁 A.Cummins 女史が来賓として出席され、イコモスとの連携を訴えるスピーチを賜りました。委員会終了後の遅めのランチでは、残っていた執行委員全員がイラン料理の卓を囲み、いっそう親睦を深めたのでした。(岡田)

王力軍氏 ICOMOS 平泉調査随記

前野まさる

去る9月7日より平泉の世界遺産登録に関するICOMOSの現地調査がありました。この調査について、日本ICOMOS国内委員会から誰か参加するようにとの連絡が文化庁からあり、私にお鉢がまわり参加した次第です。以下に報告というより感想を申し上げます。

調査員の王力軍氏とは2007年にフィリピンで開催されたCIAV年次会議で会った旧知の仲で「やあやあ」でした。

調査は9月8日、9日の2日間でした。初日には9時から平泉 Pure Land のビデオ説明が20分ほどあり、その後文化庁の説明と王氏の質疑応答で、王氏からはバッファゾーン内の高さ規制、来訪者のコントロールについて質問が集中していました。

その後、駒形峰、毛越寺、観自在王院跡、金鶏山の現場視察を行いました。その後のミーティングでも周辺地域の開発計画とバッファゾーン内の建築の高さ規制について質問、10m、13m、15mの地域規制の回答を得、その高さが資産に与える影響について関心を寄せていました。

翌9日、無量光院跡、柳之御所遺跡、中尊寺を視察。



柳之御所遺跡背後に見える高圧線鉄柱の移設問題について質問していました。

9日の視察終了後東京に戻り、八重洲富士屋ホテルで日本イコモス国内委員会主催の王氏の歓迎会を催しました。平泉の状況は2007年にスリランカのジャガース氏が平泉の調査に来た時から見ると、はるかに整理され「仏国土（浄土）」が見えて来たように思いました。



毛越寺僧侶より説明を受ける王委員

琵琶湖疏水竣工120周年記念シンポジウム 「琵琶湖疏水を世界遺産へ！」報告

刈谷勇雅

去る9月18日、日本イコモス第3回拡大理事会が京都市の南禅寺と岡崎公園にほど近い京都市立琵琶湖疏水記念館で開催され、西村委員長をはじめ多数の理事等が参加した。理事会と疏水記念館の展示見学の後、蹴上インクライン、舟溜まりと疏水第3トンネル出口、蹴上水力発電所など琵琶湖疏水の遺構を見学した。参加者は、明治中期に建設された琵琶湖疏水が、京都の近代化やその後のまちづくりに大きな役割を果たした総合的な開発であり、今も京都の飲料水源として活用され、そのルートが哲学の道などとして市民のみならず多くの来訪者へ憩いを与え続けていることに強い感銘を受けた。

翌9月19日には、上記の蹴上インクラインに近接する京都市国際交流会館にて、京都市と京都商工会議所の共催による『琵琶湖疏水竣工120周年記念

シンポジウム・琵琶湖疏水を世界遺産へ！』が開催された。このシンポジウムは琵琶湖第一疏水が明治23年（1890）年に竣工して今年が120周年にあたることを記念するとともに、琵琶湖疏水の価値を再認識し、世界文化遺産登録の可能性について討議しようと企画されたもので、会場には約200人の市民や専門家が詰めかけた。

まず、琵琶湖疏水のほとりに小学3年生の時から住んでいるという東海旅客鉄道株式会社相談役、須田寛氏が「琵琶湖疏水を見つめ直そう」と題して基調講演を行った。琵琶湖疏水は総合産業観光資源であり、京都の観光に幅と厚みを加えるものとして、広域的な視野に立っての保全と観光的活用を訴えた。氏の経済人としての長い経験と博識に裏付けられた講演は非常に説得力のあるものであった。

須田氏の講演に続き、京都府立大学宗田好史氏がコーディネーターとなって、前国土交通省都市計画課長で現京都市副市長の由木文彦氏、九州の産業遺産の世界文化遺産登録を支援している都市経済評論家加藤康子氏、東大教授・日本ICOMOS会長西村幸夫氏の3氏によるパネルディスカッションが行われた。3氏は産業遺産、近代化遺産としての琵琶湖疏水の価値を再確認するとともに、その世界遺産登録の可能性について論じあった。宗田氏の絶妙な進行のもと、3氏の議論は盛り上がった。由木氏は、琵琶湖疏水についてその関連の庭園等も含めて、長期的な取り組みの中で世界文化遺産登録をめざしたいと訴え、西村氏は「我が国は暫定リストを整備し直したばかりであり、新規のリスト入りは困難であることから世界遺産登録はすぐには無理ではないか。既登録の「古都京都の文化財」に加えようとしてもおおがかりな変更となり、難しい。琵琶湖疏水は新しい概念の遺産であり、しっかりした議論が必要」との趣旨の発言で締めくくった。

今回のシンポジウムは、琵琶湖疏水が京都のみならず、世界にとっても重要な文化遺産であることを市民はじめ世論に強くアピールし、保存と活用への取り組みを強める良い機会となったと言えよう。

マイルズ・オグリソープ氏講演会報告

山内奈美子・ウーゴ ミズコ

去る10月18日、ヒストリック・スコットランドの政策責任者であり、TICCIH（国際産業遺産保存委員会）の英国代表であるマイルズ・オグリソープ博士より、日本イコモス会員に向けて講演をいただく機会に恵まれました。会が実現したのは一重にオグリソープ氏のご厚意と、氏を日本まで招聘して下さった新潟県および佐渡市のご厚情によるものでした。また、お忙しい中足をお運びいただきご参加いただいた皆様にも、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。

約一時間の講演でしたが、イギリスの世界遺産暫定リストがどのように見直されたのか、という行政担当ならではのホットな最近の動向と、スコットランドの暫定リストに記載されているフォース鉄道橋に関する数多くの興味深い写真とユーモアあふれる語りがあったという間に時間は過ぎてしまいました（そう、皆様はスコットランド 20 ポンド紙幣に明治の日本人橋梁技師渡辺喜一氏が堂々と載っていることをご存じでしたでしょうか？）。

その後こじんまりとした懇親会を設けたところ、オグリソープ博士は直接日本の会員の方とお話できたことを大変お喜びのご様子でした。（山内）



* * *

マイルズ・オグリソープ氏の講演は、イギリスで近年発表された報告書に基づく理論的解説と、日本とイギリスの具体的な事例紹介による二部構成でした。第一部は、イギリスの世界遺産暫定一覧表を出

発点として、暫定一覧表に登録されている文化遺産の種類についての考察が中心でした。“place making”と呼ばれる、地元住民に利する世界遺産の重要性が指摘され、「世界遺産」の役割や「世界遺産」というステータスの意味をあらためて考えさせられる刺激的な内容でした。第二部の事例としては、まずは訪れたばかりの「佐渡金銀山」、さらに、スコットランドの産業遺産を代表するフォース・ブリッジ（The Forth Rail Bridge）について。前者については、同類の遺産との比較分析の必要性を強調し、官と民、さらに中央政府、自治体、住民間の協力が、遺産の効果的かつ継続性のある保護体制に欠かせないことが指摘されました。後者については、とりわけその価値について、さらにもっとも大きな課題として、所有者と行政の意見の相違に関して説明がなされました。オグリソープ氏が紹介したこれらの事例を通じて、日本における世界遺産登録活動の強みと改善点、同時にイギリスにおける現状と推薦書の準備方法について学ぶことができ、非常に意義深い講演会でした。唯一、講演時間が短かったことだけが残念でした。（ウーゴ ミズコ）

平成 22 年度東京倶楽部助成事業「CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会」報告

杉尾邦江

標記国際研究会は東京倶楽部の助成を受け既に第1回国内研究会を平成22年10月25日（月）午後6時より日本イコモス国内委員会事務局会議室において、また第2回国内研究会を11月13日（土）同じく事務局会議室に於いて開催された。今後の予定はCIIC・日本イコモス国内委員会合同第1回国際研究会は来る11月23日からスペイン・マドリッドで開催されるCIIC総会の開催期間内11月27日に同総会会場にて行う。CIICのメンバーである杉尾邦江及び大野渉が出席の予定である。



ここでは、これまで行った第1回及び第2回の国内研究会の成果について報告する。

1 CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会メンバーの決定

日本イコモス国内委員会内国際研究会構成委員及び国内研究会メンバーを下記のように決定した。

1) 国際研究会メンバー

委員長：西村幸夫

委員：河野俊行、前田耕作、稲葉信子、岡田保良、崎谷康文、宗田好史、三宅理一、杉尾邦江、大野渉、清水真一（事業担当理事）、矢野和之（事務局）

2) 国内研究会メンバー

杉尾伸太郎、張大石、山内奈美子

2 第2回 CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会討議結果

日時：平成22年11月13日（土）10:00～12:00

場所：千代田区一ツ橋2-5-5 岩波書店一ツ橋ビル

13階 文化財保存計画協会 会議室

出席者（五十音順）：稲葉信子、大野渉、岡田保良、崎谷康文、杉尾邦江、前田耕作、三宅理一（以上、国際研究会メンバー）、張大石（東北芸術工科大学准教授）、山内奈美子（以上、国内研究会メンバー）、毛利和雄（オブザーバー）

1) 議事要旨

(1) 第一回国際研究会の開催

・CIICの2010年総会がスペイン・マドリッドで来る11月23日（水）～28日（日）まで開催される。27日に同会場にて開催する。

・第一回、第二回国内会議での検討を踏まえて検討議論する。

・CIIC総会、国際研究会には、CIIC委員会の委員でもある杉尾邦江委員、大野渉委員の2名が出席予定。

・次回国際研究会は来年2011年にフランス・パリ郊外で開催されるICOMOS総会にあわせて開催される予定。

(2) テーマ及び研究会の進め方の検討

①テーマについて 検討の結果下記の通り決定した。主題「世界遺産は如何に世界平和に寄与するか－文化の道及び transnational/serial nomination 事案を素材として－」

Main Theme “How Can and Should World Heritage Contribute to the Furthering of World Peace - With a Focus on Cultural Routes and/or Transnational/Serial Nominations”

サブテーマ1. 紛争の原因と対応可能性の分析・検討

Subtheme 1. Analysis of Causes of Conflicts and Possibilities of Solution

サブテーマ2. 効用及び貢献の分析

Subtheme 2. Analysis of Benefits and Contribution

サブテーマ3. 世界遺産への推奨と保護の強化

Subtheme 3. World Heritage Nomination and Strengthening of Protection

サブテーマ4. 遺産の監視及び管理システムの構築

Subtheme 4. Establishment of Systems for the Monitoring and Management of Heritage

参考 2011年イコモス総会のテーマは“Heritage as the Driver of Development”となる予定。

②研究会の進め方について

・サブテーマの1及び2については、国内研究会でブレインストーミングを続ける。

・次回第3回国内研究会は2011年2月4日（金）に開催する。

・第1回国際研究会では、国内研究会での議論の結果について説明し、国際研究会の進め方について意見を聞く。その結果を国内研究会に報告するが、必ずしも国内研究会と国際研究会で全く同じ形をとる必要はない。それぞれの方法で研究会を進め、最終段階で発表、議論する機会を設ける。

・Facebookのようなサービスを利用して、国内委員会メンバーと国際委員会メンバーで意見交換できると更に良い。どのような方法が適切か検討する事とする。

2) 今後の予定

①第一回 CIIC・日本イコモス国内委員会共同国際研究会

11月27日 CIIC 総会会場ポリテクニカ マドリッド大学にて開催、日本イコモス国内委員会共同国際研究会国内研究会で検討された事項を議案として討議する。

②第3回国内研究会は2011年2月4日(金)に開催予定

ICOMOS-IFLA 文化的景観国際学術委員会 2010年総会報告 (イスタンブール)

杉尾伸太郎・山田素子

<概要>

ICOMOS-IFLA 文化的景観国際学術委員会の2010年総会がトルコのイスタンブール工科大学を会場として、2010年10月4～6日の3日間にわたって開催された。10月7～8日はエクスカージョンであった。世界各国から40名以上が集まり、日本からは、本委員会杉尾伸太郎副委員長、石川幹子東京大学大学院教授、山田素子ブレック研究所文化財保護研究センター研究員の3名が出席した。

10月4日(1日目)は、“Historic Gardens and Parks in and around the Mediterranean”と題して公開シンポジウムを行った。ICOMOS-IFLA 会長である Monica Luengo 氏(スペイン)のイントロダクションに始まり、トルコ、イタリア、フランス等の庭園が紹介された。日本からは、杉尾伸太郎が“Andre Le Notre and Establishment of French Gardens”、石川幹子教授が“Creating Ecological Networks in Tokyo Bay Area. The Role of Historic Gardens and Parks”と題する発表を行った。

10月5日(2日目)の午前は、ICOMOS-IFLA 総会であった。前会長である Robert de Jong 氏(オランダ)が10月1日に逝去されたことをうけ、会議の冒

頭に参加者全員で黙祷を捧げた後、メンバーの活動状況等が報告された。本委員会は世界遺産候補地の視察等に非常に貢献しているが、desk review や on-site mission の指針が充分なく、ミッション終了後もそれに対するフィードバックがないことについて、メンバーから不満の声が挙げられた。これに対して、将来的に委員会内でワークショップを開催する等の意見が挙げられた。イコモス本部の今後の活動プログラムとして2012年には“Heritage on Rural Site”、2013年には“Heritage in City and Town”、2014年には“Heritage in Metropolis/Megalopolis”となることが発表され、本委員会が扱う文化的景観との関連については不透明な点が多いが、今後こうした分野における研究が活発になる見通しである。人事関係に関しては後述している。午後は、メンバーによる自国の庭園の事情について発表があった後、“Historic Parks Charter”の草案について Historic Park の定義や、Charter とする必要があるか等についての議論がされた。

10月6日(3日目)は、Juliet Ramsay 氏(オーストラリア)、Nora Mitchell 氏(アメリカ)、Nancy Pollock-Ellwand 氏(カナダ)による、“Assessing Aesthetic Values of Landscape for World Heritage”と題したワークショップであった。3名は昨年日本で開かれた富士山世界遺産推薦についての国際会議に招聘されており、その会議における世界遺産の評価基準(vii)、いわゆる Natural Beauty についての議論が、今回のワークショップ開催の発端となった。自然美をどのように評価するのか。ワークショップでは、まず東洋と西洋の美に関する考え方が発表された後、5つのグループに分かれて世界遺産である資産の写真を見ながら、何が美しいのか、なぜ美しいのかを話し合い、その結果を全体で報告した。筆者らの所感であるが、美しさの評価は客観性を持たせることが難しく、また評価する人によって感じ方は様々でありひとつの基準を設けることが不可能である。ワークショップ主催者からは、今後も自然美についての研究を進めていくという方向性が示され



た一方で、参加者からは地域や組織の枠組みを超えた議論が必要であろうとの意見もあった。本委員会が扱う文化的景観という言葉が自然の美しさをも含めた非常に幅広い分野にわたることを改めて認識したとともに、自然美については、本委員会が主体となって調査・研究を進めていくべき課題であることを強く実感した。

10月7日(4日目)は、イスタンブールの遺産をめぐるエクスカージョンであった。はじめにイスタンブール市街地の歴史的発展についての発表があった後、トプカピ宮殿、アヤソフィア、地下宮殿、ブルーモスクを視察した。

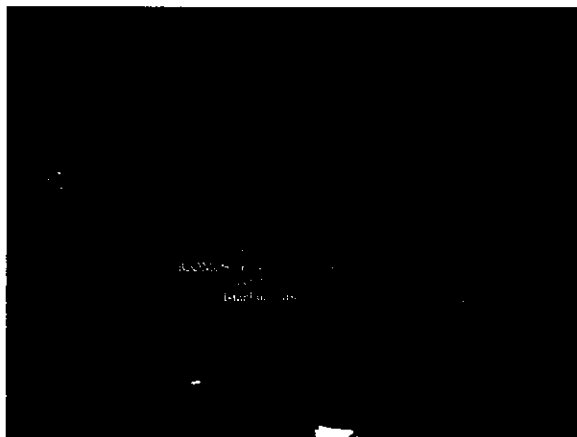
10月8日(5日目)は、ボスポラス海峡沿いにあるドイツ領事館の邸宅やベイレルベイ宮殿等を訪れた。

2011年の総会は、11月にフランス、フォンテーヌブローで開催されるイコモス総会にあわせて開催される予定である。

<人事関係>

今年の総会では、計9名の新メンバーが承認され、日本からは石川幹子教授と山田素子が新たなメンバーとなることが承認された。

また、より様々な地域や国を委員会のメンバーに加えるべきとのイコモス本部の方針を受け、アフリカや東欧、アジア諸国に対して個人的に働きかけるよう求められた。



3日目ワークショップの様子

ISCARSAH 歴史的建築物の解析と構造修復に関する国際学術委員会報告(上海)

花里利一

2010年2回目のISCARSAH委員会は、歴史的建築物の構造解析に関する国際会議(SAHC2010)の開催に合わせて、10月6日、7日に中国上海の同済大学において開かれました。委員会には、Kelly(米国)、Modena(イタリア)の両委員長のほか約20名の参加者であった。日本からは、私と岩崎委員が出席しました。初日の6日には、同済大学土木工程学院の呉教授の挨拶と中国での歴史的建築物の構造研究の紹介があり、その後、各国参加者から数分程度のプレゼンテーションがなされました。委員会では、前回のエジンバラ会議に引き続き、SCIEN(Structural Conservation Information Exchange Network)案について審議しました。このSCIENは、ISCARSAHが運営するウェブサイトとして、学術論文、国際会議論文などの学術情報を提供するもので、例えば、組積造、木造のような構造材料ごと、中世、近代など時代ごとなど、検索すれば、文献が入手できるようにするものです。まだ、著作権など実施上の課題もあり、案として審議している段階ですが、近いうちに実現できるよう委員会では審議が続けられています。10月7日には、次回キューバ会議(2011年5月予定)の開催について審議があり、ハリケーンと地震に関する防災対策がテーマとなり、合わせて2日間のワークショップも開催することになりました。私は、その実施ワーキンググループ(task group)の委員になりました。さらに、ICORPとも連携して活動を進めることになり、Modena委員長がその委員に加わることになりました。

さて、今回の委員会は、国際会議SAHC2010に合わせて開催されたものでしたが、この国際会議の開催からもわかるように、中国も歴史的建築物の構造に関する研究に力を入れており、かなり多くの研究者や技術者がこの分野に携わりつつあります。しか

し、日本は少なくとも耐震工学は先導している分野ですので、歴史的建築物の耐震研究では、主導的な役割を果たす必要性を感じました。この国際会議には、各国から約 200 名の参加者があり、日本からは数名の参加者でした。論文集も 2 分冊 1200 ページを超えるもので、現時点の国際的な動向が把握できます。私自身は、組織委員会から招待講演を依頼されましたが、木造五重塔について講演の希望があったので、“Seismic and Wind Performance of Five-Storied pagoda of Timber Heritage Structure” のタイトルで木造五重塔の耐震・耐風研究の歴史の紹介から始め、構造解析の実施例や現在進めている重要文化財五重塔の地震・風観測の成果について講演しました。海外とくに西欧の研究者には、組積造はともかくとして、やはり日本の伝統的な木造建築に対する関心が高いようです。



SAHC2010 に合わせて開催された ISCARSAH の会場 (同済大学)

ICOMOS-CAR 岩面画国際学術委員会 活動報告

五十嵐ジャンヌ

9月6日から11日まで、フランス・アリエージュ県タラスコン=シュール=アリエージュにて、IFRAO (International of Rock Art Organizations) 主催による『更新世の美術』学会が開催され、日本からは小川勝氏と五十嵐が発表を行った。総会では、前 ICOMOS-CAR 会長ジャン・クロット氏が次期

IFRAO 会長に内定された。

日本先史岩面画研究会 (本研究会代表兼 ISC 代表: 小川勝) は、9月11日から25日まで、スペインの中石器時代岩面画遺跡 (レミヒア、アルバラシン、ラ・アラニーヤなど)、フランスの後期旧石器時代洞窟壁画遺跡 (ニオー、ベディヤック、マス=ダジル、ガルガス) の調査を行い、各地博物館・研究施設を視察した。

11月7日、北海道余市町にてフゴッペ洞窟発見60周年を記念して開催された岩面画国際シンポジウム『世界から見たフゴッペ洞窟』では、大阪大学名誉教授・木村重信氏による基調講演、フランス国立自然史博物館ドゥニ・ヴィアル教授、同博物館アゲダ・ヴィレーニャ・ヴィアル教授、中国三峡大学・楊超教授による報告がなされた。11日、京都・関西日仏学館にてヴィアル教授による講演会が行われた。13日、東京・国立科学博物館新宿分館にて『岩面画研究の最前線』というワークショップが開催され、ヴィアル教授、楊教授、五十嵐が発表した。いずれも日本先史岩面画研究会が企画した講演会であり、日本各地で、岩面画についての知識を普及し、岩面画遺跡保存の重要性を深く考える機会を与えることができた。

韓国岩面刻画発見40周年記念国際研究 集会に参加して

小川 勝

2010年10月26日、27日の2日間にわたって、韓国のソウルで開催された、チョンジョンリ (川前里) 岩面刻画の発見40周年記念国際研究集会に、招待されて発表を行った。主催は東北アジア歴史財団で、そのホームページでは「独島 (竹島) 領有問題」や「東海 (日本海) 命名問題」に関し激しい論調を展開していて、私も少し緊張していたが、日本や欧米への留学経験が豊かな気鋭の研究者が多数所属していて、



ナショナリズム的な雰囲気は微塵も感じられなかった。

担当者は、先史岩面画の専門家であるチャン・ソグホ（張錫浩）氏で、滞日経験もあり、日本語も理解するが、ロシアへの留学、調査経験が長く、ロシア語が堪能な国際的研究者である。その人脈のせい、ロシア、アゼルバイジャン、カザフスタン、モンゴルなど、ロシア語を話す研究者が多く参加していて、私がこれまで関わった国際研究集会とはいささか異なった趣だった。会場は5年前に移転して開館した、壮大な建築の国立中央博物館・セミナー室だった。プログラムは「1、発見と調査」、「2、中央・北東アジアの岩面画」、「3、岩面刻画の解釈」、「4、岩面刻画の保存」に分かれ、私は第2セッションで、北海道余市町にあるフゴッペ洞窟・岩面刻画の年代決定についての研究発表を行った。私のすぐあとには北朝鮮の研究者の発表が予定されていたが、本人は現れず、原稿が代読されるのみだった。ロシア経由で朝鮮半島の両国間で研究者の交流もあるようであり、今後の展開が楽しみである。最後の発表は韓国ユネスコ平和センター所長のフ・コン氏が行い、チョンジョンリとその翌年に発見されたパングデ（盤亀台）岩面刻画の世界文化遺産登録への意欲が語られた。

28日、29日の2日間は朝鮮半島南東部にある、上記2遺跡などへの見学旅行があり、韓国へは4度目の訪問だった私も、初めて実見する遺跡があり、大層興味深かった。パングデは、川べりにある遺跡で、その日は、遺跡直下の足場が水没していて、50メートル以上離れた対岸から見しかなく、この状況を何とかしないと世界文化遺産どころではないだろうと、批判的意見を述べる外国人研究者もいた。一方で、パングデのすぐそばに蔚山市立岩面刻画博物館が2年前にオープンしていて、このような岩面画専門の施設は世界的にも珍しく、関心の高さが認められた。

日本イコモス国内委員会関連行事報告

■百舌鳥・古市古墳群世界遺産暫定一覧表掲載記念講演会

小川裕見子

平成22年7月25日（日）に大阪府立大学内のUホール白鷺において、『百舌鳥・古市古墳群世界遺産暫定一覧表掲載記念講演会』が開かれました。これは、同年6月14日に、国の文化審議会文化財分科会世界文化遺産特別委員会において、百舌鳥・古市古墳群の世界遺産暫定一覧表記載が審議され、了承されたことを記念して、大阪府・羽曳野市・藤井寺市共催のもと堺市によって主催されたものでした。その後、10月6日の世界遺産条約関係省庁連絡会議において日本政府として正式決定されました。

講演会は、午後1時半に堺市長のご挨拶とともに始まり、日本イコモス国内委員会委員長でもある東京大学教授の西村幸夫先生と福岡県立九州歴史資料館館長の西谷正先生のご講演がありました。『世界文化遺産の考え方』と題した西村先生のお話では、幅広い聴衆にわかりやすく世界遺産登録のシステムとこれまでの経緯、登録可否の判断基準となる「価値」がひもとかれた後に、現状の問題点と登録資産の新しい傾向について紹介されました。それは「顕著な普遍的価値」の判断が困難であることや、都市における周辺開発がとめられないという実態や、バッファゾーンの検討が現代の資産の価値に大きく影響するといったものでした。そうした近年の傾向は、百舌鳥・古市古墳群にも大きく関わる同様の課題でもありました。つづく『東アジアから見た百舌鳥・古市古墳群』と題した西谷先生のお話は、朝鮮半島をはじめ東アジアの墳墓群に造詣の深い立場から、古代国家形成期における東アジアの国際交流及び、技術移転の粋が百舌鳥・古市古墳群において特に顕著に現れていることを、他の巨大墳墓群との国際比較をもって示されました。

熱のこもった2本のご講演の後、午後4時半に講

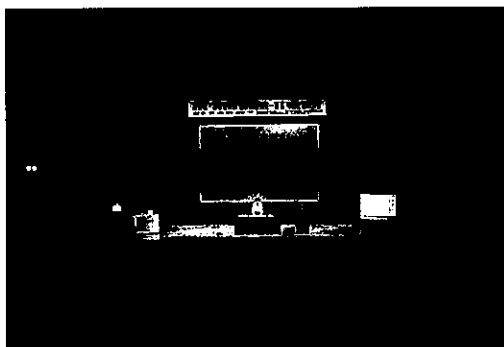
演会は終了しました。当日、ホール入り口周辺のロビーには、百舌鳥・古市古墳群の主要古墳の数々の写真のパネル展示もあわせて行われました。休憩時間には熱心にパネルに見入る来場者の姿がうかがえ、当日はおよそ 700 人もの参加者に及びました。堺市や南河内地域のボランティアの方々も団体での参加があり、地元住民の関心の高さもうかがえ、世界遺産登録に向けたタイミングのよい気運醸成のよいきっかけとなりました。

4 世紀末から 6 世紀前半にわたって大古墳が築造された百舌鳥・古市古墳群には、世界最大級の仁徳陵古墳などが含まれ、世界的に見ても傑出した規模をもち、日本独自の巨大な前方後円墳をはじめ様々な墳形や規模のたくさんの古墳で構成され、古墳群そのものに当時の政治構造や階層社会が表現されています。この傑出した価値をもつ百舌鳥・古市古墳群を次世代へと継承し続けてゆくことは、私たちの責務といえます。

紅葉の美しい季節となり、古墳巡りには最適の季節が来ました。ぜひ皆さんも百舌鳥・古市古墳群一度足をお運びください。



パネル展示の様子



講演会場の様子

■シルクカントリー in 下仁田

松浦利隆

平成 22 年 9 月 4 日 (土) 5 日 (日) の 2 日間、上毛新聞社と群馬県は、群馬県下仁田町で、「下仁田の輝く絹の歴史を再発見しよう！」をテーマにシルクカントリー in 下仁田というイベントを開催しました。

下仁田町は、富岡製糸場の西隣の町で、現在は下仁田ネギやコンニャクの生産が盛んです。しかし、明治時代には養蚕製糸農家が「下仁田社」という生糸販売の組合をつくり大量の生糸を産出していました。また、同町には蚕の卵の冷蔵保存により養蚕多回数化に貢献した日本最大規模の「荒船風穴」や、繭や生糸の輸送に活躍した「旧上野鉄道関連施設」(現在の 上信電鉄) があります。これらは「富岡製糸場と絹産業遺産群」の構成資産として世界遺産候補になっています。

本イベントでは、これらの絹にかかる歴史や文化に光をあて、シンポジウムや、絹の国・俳句ラリーバス&トーク、世界遺産列車「シルクカントリーぐんま号」等の事業を実施し、約 300 人が参加しました。



世界蚕列車の中で紙芝居





■第5回文化遺産のデジタルドキュメンテーションと利活用に関するワークショップ

高瀬 裕

日時：2010年9月21日（火） 10:00～17:00

場所：パシフィコ横浜・会議センター（3階）

主催：動体計測研究会（ARIDA）（G空間 EXPO に連携して開催）

後援：（社）日本写真測量学会、（社）日本測量協会、日本イコモス国内委員会

文化遺産の修復・保存、考古学、歴史学、建築学などの分野における新しい計測と表現の技術を利用した文化遺産のデジタルな記録・保存（デジタルドキュメンテーション）と利活用、公開の促進を目的に、日本国内における関連諸分野の連携の増強をめざして、文化遺産のデジタルドキュメンテーションとその利活用に関わる研究者、実務者、行政担当者らの情報交換と交流の場を提供する本ワークショップの第5回を開催した。

本ワークショップは、昨年に京都で開催したアジアで初めての第22回CIPA国際シンポジウムのプレイベントと位置付けて2007年に始めたものであり、毎回多数の関連分野の研究者、実務者、行政担当者の参加を迎えてきたが、今回のワークショップも9名の発表者と約70名の参加者による活発な議論と情報交換の有意義な場となった。

基調講演（東京大学・池内克史教授）を含む9件の発表では、多数かつ多様な文化遺産のデジタル記録と活用の事例が紹介されたが、利用技術としては、レーザー計測、デジタル写真測量などの3次元計測技術を利用したものが多く、特にレーザー計測が目立った。対象の規模としては、貨幣などの小さなものから、仏像、建造物（寺院、近代化遺産など）、遺跡（城郭、宮城、競技場、劇場、神殿など）、街並み（金沢、京都など）、都市（京都）、広域地形まで広い範囲に及び、無形文化遺産（祇園祭など）の事例も紹介された。また、日本国内の文化遺産のみならず、

カンボジアのアンコール、イタリアのポンペイ、ギリシャのメッセネなど国外の事例が多数含まれた。取得されたデジタルデータ（主に3次元データ）の活用としては、CG、バーチャルリアリティー、複合現実感、GIS、インターネット配信など、先端的な技術を活用した多様な表現が見られた。

それぞれの発表の後に行われた質疑応答では、記録、データ処理、表現などの手法、今後の展開などに関して活発な議論と情報交換が行われた。さらに、本ワークショップの後に場所を移して開催した懇親会にも多数が参加し、さらに詳細な情報の交換と交流が行われた。

■第12回世界歴史都市会議

ワークショップ「歴史都市の文化継承のための制度設計」

トピック2「歴史都市の防災」開催報告

大窪健之

10月13日（火）9:00～12:30まで、世界各国の10名の専門家から、文化遺産を守るための施策と、地域の取り組みとを有機的に結び付けた総合的な災害対策に向け、様々な視点から先駆的な取り組みや課題について、話し合っていました。ご発表は多岐に渡りましたが、災害の種類別に大きく5つのサブテーマに整理してご報告します。

(1)「災害全般」に関する現状と対策

ミャンマーからは、保存に向けた歴史教育と、被害軽減へ向けた防災教育の必要性が報告され、途上国での対策の緊急性が共有されました。イギリスからは、産業遺産の被災状況から近年の災害対策に至るまでのご紹介があり、産業遺産そのものにも、防災の工夫が備わる例を見ることができました。

(2)「地震災害」に関する現状と課題

ネパールの報告では、歴史都市バタンでの、地震危険性と都市の特性を踏まえた避難計画の提案が示

され、伝統的な都市構造を維持することを、災害対策に結びつけようとするアイデアが提示されました。インドネシアからは、住民参加による災害モニタリングの試みが紹介され、観光関連団体を含む様々な防災組織間のマネジメントの重要性が共有されました。同じく地震災害の調査結果からは、歴史都市を維持し「生きた遺産」として使い続けることの重要性が、防災の視点からも明らかになりました。

(3) 「都市火災」に関する分析と計画

日本からは、歴史都市・京都に対する、最新のシミュレーション技術を援用した延焼危険性評価の結果について提示がなされ、歴史都市では文化遺産への延焼危険性も高いことが明らかになりました。タイからは、歴史ある市場の火災対策について具体的な改善計画案が提示され、住民参加のプロセスを経ることの有効性が強調されました。

(4) 「洪水対策」と町並み保存計画

同じくタイから、古都アユタヤの川辺に残るピラーハウスの近代化と改変の状況について紹介され、災害対策がそのまま景観保全に寄与できるような、伝統様式の見直しの大切さが共有されました。

(5) 「人災対策」とコミュニティ計画

インドからは、ユネスコの枠組みを踏まえながら、人災を含む歴史都市の改変に対する問題提起とフレームの提示がなされ、市民を巻き込んだマネジメントや国際協力の重要性が共有されました。日本からは、京都での取り組み事例を踏まえ、コミュニティプランニングによる、災害対策、環境保全、地域開発など6つの価値観の相互連携の必要性が示されました。

歴史都市の「災害対策」は、本来、「保全」のための基盤となるべき政策ですが、これまで本格的に議論される機会が少なかったのが実情です。このワークショップをきっかけとして、固有の課題や個別の取り組みの経験を国際的に共有し、歴史都市の災

害対策を現実に推進していくための「スタートライン」に我々が立てたことは、発表者の皆様、フロアの皆様との共同作業による大きな成果であったと思います。

■歴史的用水国際シンポジウム in 金沢

岡田宜之

10月14日から15日にかけて、「歴史的用水国際シンポジウム in 金沢」が石川県金沢市（市文化ホール）で開催された。歴史的用水をテーマとした日本初となる国際的なシンポジウムであり、国内外の研究者が参加し、都市と水とのつながりを伝統・文化・気候の観点から捉え、都市水利の国際的な考察の場として貴重な機会となった。このシンポジウムは、歴史的用水国際シンポジウム実行委員会（委員長：玉井信行金沢学院大学大学院教授）と金沢市が主催者となり、昨年9月より企画・準備を行ってきた。

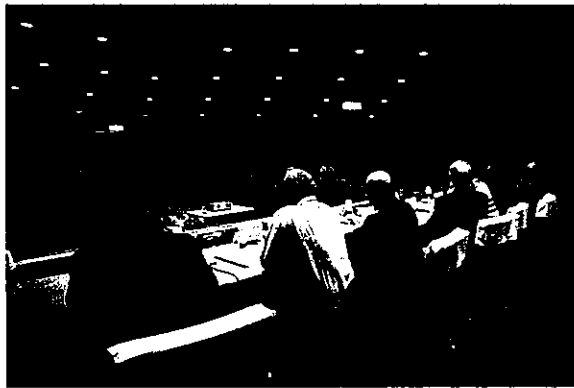
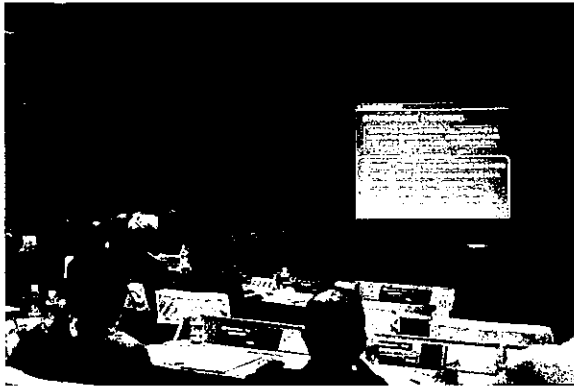
金沢には55本、総延長約150kmの用水が流れており、本年2月には辰巳用水が国史跡に指定され、辰巳用水、大野庄用水、鞍月用水を含む金沢城跡周辺区域などが「重要文化的景観」の選定を受けている。この「用水のまち」を会場に、用水の価値を保全し、次代へ継承していくため、ピエール・ルイ・ヴィオレ氏（フランス）による「ギリシャ・ローマ世界における水道と市民生活」の事例発表などイラン、オーストラリア、アメリカからの講演者を含む8名の講演・事例発表が行われた。私も講演者の1人として、金沢の用水を再生するために実施した条例制定をはじめとする金沢市の取り組みについて報告を行った。

また、パネル・ディスカッションでは「都市と水—その望ましい姿」と題し、歴史的用水が、地域の伝統、文化、気候の影響を受け変化していく中で、グローバルなものとローカルなものをどのように捉え、保全していくかについて議論を深めた。

15日午後には、講演者と参加者が大野庄用水、鞍月用水、辰巳用水（横穴・三段石垣）、兼六園、金



沢城跡をともに見学した。約 300 人が参加し、歴史的用水の価値を国際的な観点から見つめ直した 2 日間となった。



(上・下) 金沢の国際シンポジウムの様子

■国際シンポジウム「金を中心とする佐渡鉱山の遺産群」

小田由美子

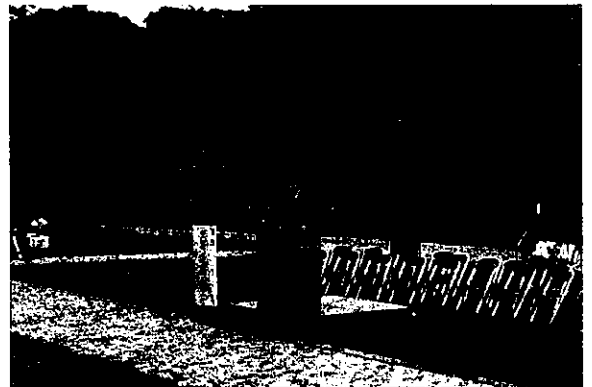
10月17日(日)、佐渡市相川において、世界遺産暫定リスト記載が決定した佐渡金銀山の登録への課題を整理し、機運を盛り上げるための国際シンポジウムを開催した。

国際産業遺産保存委員会英国代表のマイルズ・オグリソープ氏が基調講演を行い、小風秀雅氏(お茶の水女子大学大学院教授)がコーディネーターを務め、篠原修氏(政策研究大学院大学教授)、稲葉信子氏(筑波大学大学院教授)、澤邊一郎氏(株式会社ゴールデン佐渡取締役社長)、本中眞氏(文化庁

記念物課世界文化遺産室主任文化財調査官)によるパネルディスカッションが行われ、240名の参加があった。

佐渡金銀山は400年以上の長期にわたる鉱山技術の変遷を目の当たりにできることが大きな特徴であり、中でも近代遺跡は鉱山システムの全容を示す施設群が保存され、世界遺産の構成資産としても重要な位置づけとなっている。この近代遺跡の保存と活用を中心にパネルディスカッションが行われた。パネリストからは、地元が金銀山の価値を認識し「自分たちの遺産」として語ってほしい、登録までの過程を地域みんなで楽しんでほしいという意見が出された。

前日夕刻には、整備されたばかりの北沢浮遊選鉱場遺跡公園で、篠原修氏による講演(「今、何故、遺産・文化・景観なのか」)とプラスバンドコンサートを開催した。迫力ある近代遺跡景観の中での野外イベントは、非常に好評で、今後の活用が期待できるものとなった。また、近代遺跡に親しんでもらうために開催したボランティアガイドと共に遺跡を巡る見学ウォークも、多数の参加者があり、暫定リスト記載を盛り上げるよい機会となった。



北沢浮遊選鉱場遺跡公園における篠原修氏講演会



■トルコの古都・ベルガマ訪問記—歴史と共に生きる

狩野朋子・黄 ワンウェン

トルコのイズミル北部に所在するベルガマ市は、人口 10 万人程度が生活を営んでいる活気に満ちた古都で、かつてエジプトのアレキサンドリアと並ぶベルガモ王国の都として繁栄した文化都市である。アクロポリスやアスクレピオン（総合医療施設）そして市街地に所在するレッドバジリカなど、歴史的価値の高い遺産は、ドイツの考古学者やオランダの歴史家・研究者のみならず、特に欧米の観光客の関心を集めている。アクロポリスとアスクレピオンはいずれも丘の上に立地しているが、窪地には伝統的に価値のある住居が連なっており、トルコ語で「マハレ」と呼ばれる複数のコミュニティ（地区）が形成されている。「マハレ」を構成する路地は、独特で複雑な表情をもち、「ギリシャ式の住居」、「オットマン式の住居」、「ベルガマ式の住居」、そして「それらの混成住居」が織り成すファサードから、歴史の多様性を読み説くことができる。エーゲ海地域特有の色鮮やかな植物に彩られたベランダ越しに会話をしている女性達や、イスラム文化特有の行き止まりの路地で犬と戯れている子供達の姿は、訪れるものを拒まない身近な空間を創出している。

ベルガマ市は現在、世界文化遺産の登録を目指しているが、文化的アイデンティティに対する住民意識の低さと観光客誘致に向けた開発により、歴史的価値のある空間や景観が次々に破壊されつつ

ある。アクロポリスの丘には、ケーブルカー設置計画が検討されており、「マハレ」からアクロポリスの丘を眺めると、駅舎と関連施設が目飛び込んでくる。当市の都市計画部・建築調査改修課は、歴史的に価値のある空間の保全を試みつつあり、また地元建築家は伝統住居をホテルやレストランに改装するなど、人々が長年かけて作り上げてきた生活空間を守ろうとしているが、当市の自らの力に委ねながらも、歴史的遺産の保全と活用を目的としたマスタープランが必要であろう。わが国の都市・建築計画の専門家には何が出来るのか、具体的な対応のあり方についてアドバイスを頂きたい。



「ベルガマ式住居」のファサード



「マハレ」から北部を眺める。アクロポリスの遺跡とケーブルカー関連施設がつくる景観



■第 34 回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会「『復興』と文化遺産」

友田正彦

世界各地で近年多発する災害や紛争からの復興過程において、文化遺産がどのように保存修復されるかは、その過程や結果が社会に対してもたらす効果への期待と表裏の関係にあると言えます。また、そのような非常時でなくとも、社会のありようが変化するのに従って、文化遺産がもつ意味合いや保存のされ方も変化しているのが現実です。

本シンポジウムでは、国内外専門家による世界各地の具体例の発表とディスカッションを通じて、このような文化遺産と社会の関わりについて改めて考察したいと思います。

プログラムや参加申し込み方法等の詳細は下記ウェブサイトをご参照ください。

日時：2011年1月19日（水）～21日（金）

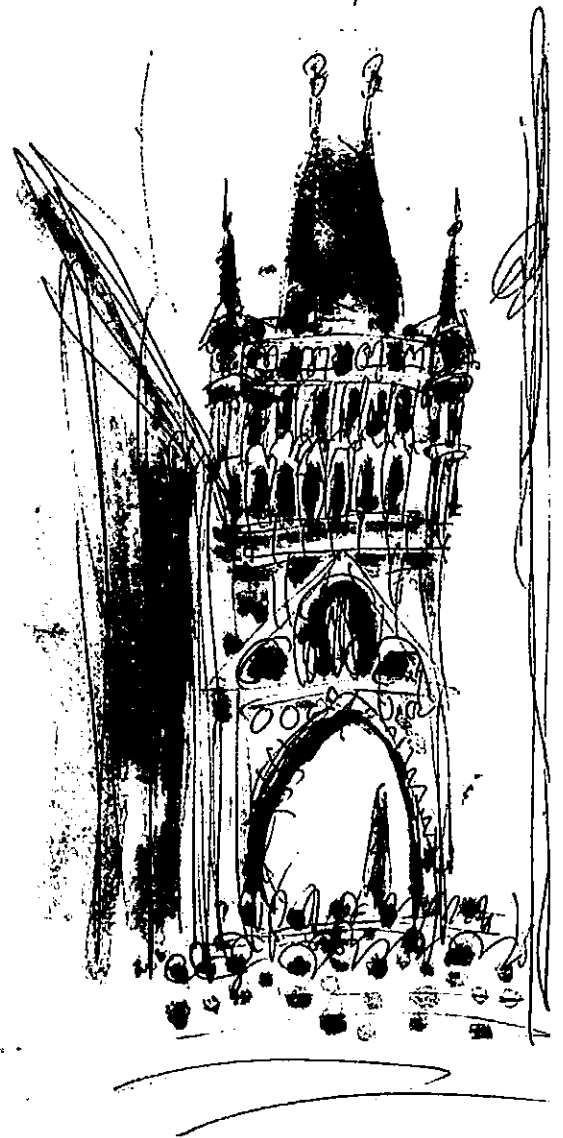
場所：東京国立博物館平成館大講堂

問合せ先：東京文化財研究所文化遺産国際協力センター

Tel: 03-3823-4898

E-mail: symposium2010@tobunken.go.jp

Website: <http://www.tobunken.go.jp/~kokusen/>



事務局日誌

(2010年8月1日～2010年11月15日)



- 8/3 株式会社ゴールデン佐渡より、佐渡金山に関するパンフレットとガイドブックを受領。
- 8/24 特定非営利活動法人全国町並み保存連盟より、「町並みかわら版 No.49」を受領。
- 9/2 財団法人ユネスコ・アジア文化センターより、「ACCU news No.378」を受領。
- 9/7 東京文化財研究所より、「東京文化財研究所 概要 2010」、「TOBUNKEN NEWS No.41」、「TOBUNKEN NEWS DIGEST No.7」、「東京文化財研究所ってどんなところ？」(子供向けパンフレット)を受領。
- 9/7-9 「平泉 一仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺産群」の世界遺産登録に関し、ICOMOS 本部より王力軍氏が調査員として派遣され、現地調査を実施。日本イコモスからは前野まさる顧問が帯同。9日夜、王氏歓迎会を八重洲富士屋ホテルにて開催。
- 9/8 定例会議を行い、第3回拡大理事会の議題、その他の進行中のプロジェクト等について協議。
- 9/10 元日本イコモス国内委員会副委員長藤本強氏の訃報を受ける。前野顧問が告別式に参列。
- 9/16 【JAPAN ICOMOS INFORMATION】第8期3号発行、会員に順次発送。
- 9/18 2010年次第3回拡大理事会開催(於 琵琶湖疎水記念館 2階 AVホール)。理事会終了後、京都市文化財保護課長の案内のもと、琵琶湖疎水を視察。
- 10/4 社団法人東京倶楽部より、「世界遺産平和宣言=伊勢宣言履行の為の国際研究」に対し、助成金250万円を受領。
- 10/6 立命館大学歴史都市防災研究センターより、立命館大学・イコモス ICORP 国際シンポジウム「文化遺産を災害からどう守るか:防災と災害復旧」(日本イコモス国内委員会後援事業)の事業報告を受領。
- 10/4-6 トルコ・イスタンブール工科大学にて、ICOMOS-IFLA(文化的景観国際学術委員会)2010年総会開催。日本イコモスからは、同委員会副会長の杉尾伸太郎氏、石川幹子氏、山田素子氏が出席。
- 10/6-7 中国上海の同济大学にてISCARSAH(歴史的建築物の解析と構造修復に関する国際学術委員会)開催。日本イコモスからは、花里利一氏、岩崎好規氏が出席。
- 10/18 会員の関口慶久氏より、「近世日本の学問・教育と水戸藩—世界遺産暫定一覧表記載資産候補「近世の教育遺産」に係る平成21年度調査・研究報告書—」(水戸市教育委員会事務局 文化振興課 世界遺産推進室編)、「世界遺産登録をめぐる「近世の教育遺産」の現状」「学問・教育遺産の提唱—「水戸藩の学問・教育遺産群」の回顧と展望—」(「常総の歴史」第39号 特集 新たな文化財の評価のあり方をめざして、2009年7月30日、嵩書房)、パンフレット「学びの文化を世界遺産に」(水戸市教育委員会事務局 文化課 世界遺産推進室発行)を受領。
- 10/18 Miles Oglethorpe氏による講演会「スコットランドの世界遺産—課題と展望」を開催(於 岩波書店アネックスビル)。終了後には懇親会も開催。
- 10/21 広報企画会議を行い、インフォメーション誌8-4号の編集方針、ホームページの更新等について協議。
- 10/26 東京倶楽部助成金事業「CIIC-日本イコモス国内委員会共同国際研究会」の第1回国内研究会を実施。
- 10/26-31 アイルランド・ダブリンにて ICOMOS Advisory and Executive Committee meetings and the Scientific Council Symposium 開催。日本イコモスからは、西村幸夫委員長、岡田保良本部執行委員らが出席。
- 11/8 来日中の Siegfried RCT Enders氏(ICOMOS Germany, ISC on Shared Built Heritage 委員長)と岡田本部執行委員、矢野和之事務局長らとによるランチミーティング。
- 11/13 東京倶楽部助成金事業「CIIC-日本イコモス国内委員会共同国際研究会」の第2回国内研究会を実施。

日本イコモス国内委員会 維持会員(代表者)

株式会社 尾田組(尾田芳信)	株式会社 鴻池組(薦田守弘)
株式会社 都市環境研究所(小出和郎)	株式会社 乃村工藝社(乃村義博)
株式会社 プレック研究所(杉尾伸太郎)	株式会社 文化財保存計画協会(矢野和之)
株式会社 トリアド工房(伊藤民郎)	「国宝松本城を世界遺産に」推進委員会(菅谷 昭)
西武建設株式会社(大澤茂治)	株式会社 京都科学(片山 保)
株式会社 小林石材工業(小林美和)	「善光寺の世界遺産登録をすすめる会」(仁科恵敏)
株式会社 丹青社(渡辺 亮)	テック大洋工業株式会社(鳥潟浩司)
株式会社 ゴールデン佐渡(澤邊一郎)	

(敬称略・順不同)

●日本イコモス国内委員会

【第8期 執行部メンバー】(順不同)

委員長	西村 幸夫
副委員長	赤坂 信
	小野 昭
理事	河野 俊行
	尼崎 博正
	稲葉 信子
	苅谷 勇雅
	岸本 雅敏
	清水 真一
	杉尾 邦江
	鈴木 博之
	西浦 忠輝
	濱崎 一志
	前田 耕作
	三宅 理一
	宗田 好史
	山田 幸正
	渡邊 保弘
監事	沢田 正昭
	崎谷 康文
顧問	伊藤 延男
	坪井 清足
	石井 昭
	前野 まさる
事務局長	矢野 和之
本部執行委員	岡田 保良

【小委員会主査】

第三小委員会 (憲章)	藤井 恵介
第四小委員会 (世界遺産)	稲葉 信子
第五小委員会 (プロブディフ)	石井 昭
第六小委員会 (鞆の浦)	益田 兼房
第七小委員会 (白川郷)	西村 幸夫
第八小委員会 (バッファゾーン)	崎谷 康文
第九小委員会 (朝鮮通信使)	三宅 理一
第十小委員会 (彩色)	窪寺 茂
第十一小委員会 (歴史的都市マスタープラン)	岡田 保良
第十二小委員会 (技術遺産)	伊東 孝



■日本イコモス ISC メンバー表 (仮) ○は、各 ISC の日本代表

委員会名	略称	委員
Analysis and Restoration of Structural of Architectural Heritage	ISCARSAH	○花里 利一・岩崎 好規・坂本 功・西澤 英和
Archaeological Heritage Management	ICAHM	○岸本 雅敏・小野 昭
Conservation/Restoration of Heritage Objects in Monuments and Sites	ISCCR	
Cultural Landscapes	IFLA	○杉尾伸太郎・石川 幹子・大野 渉・本中 眞・山田 素子
Cultural Routes	CIIC	○杉尾 邦江・大野 渉
Cultural Tourism	ICTC	○宗田 好史・石井 昭・山内 奈美子
Earthen Architectural Heritage	ISCEAH	○岡田 保良・渡辺 邦夫
Economics of Conservation	ISCEC	
Fortification and Military Heritage	IcoFort	
Historic Towns and Villages	CIVVIH	○福川 裕一・上野 邦一
Intangible Cultural Heritage	ICICH	○稲葉 信子・秋枝 ユミ イザベル
Interpretation and Presentation	ICIP	○門林 理恵子
Legal, Administrative and Financial Affairs	ICLAFI	○河野 俊行・八並 廉
Pacific Islands		
Polar Heritage	IPHC	
Recording and Documentation	CIPA	○高瀬 裕・山田 修
Risk Preparedness	ICORP	○益田 兼房・土岐 憲三・大窪 健之
Shared Built Heritage	ISCSBH	○布野 修司・村松 伸
Stained Glass		
Stone	ISCS	○西浦 忠輝・石崎 武志
Theory and Philosophy of Conservation and Restoration	ISCTC	○秋枝 ユミ イザベル・西村 幸夫
Training	CIF	○稲葉 信子・福島 綾子
Underwater Cultural Heritage	ICUCH	○荒木 伸介・池田 栄史
Vernacular Architecture	CIAV	○前野まさる・大野 敏
Wall Paintings	ISCW P	
Wood	ICC	○渡邊 保弘・土本 俊和
Rock Art	CAR	○小川 勝・五十嵐 ジャンヌ
20th Century Cultural Heritage	ISC20C	○鈴木 博之・山名 善之



JAPAN ICOMOS/INFORMATION

Vol.8, No.4 15 DECEMBER 2010

日本イコモス国内委員会 委員長 西村幸夫

事務局長 矢野和之 編集 山田幸正

〒101-0003 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 岩波書店一ツ橋ビル 13階

株式会社 文化財保存計画協会 気付

Tel & Fax: 03-3261-5303 e-mail: jpicomos@japan-icomos.org

<http://www.japan-icomos.org/>

JAPAN-ICOMOS National Committee Secretariat

c/o Japan Cultural Heritage Consultancy

Hitotsubashi 2-5-5-13F, Chiyoda-ku, Tokyo 101-0003, Japan

Tel & Fax: +81-3-3261-5303 e-mail: jpicomos@japan-icomos.org

<http://www.japan-icomos.org/>